

人権ほつと元年 10月号

「ショウ・マスト・ゴウ・オン」

大阪教育大学 教授

堀薫夫

昨年大ヒットした「ボヘミアン・ラブソデイ」は、音楽グループのクイーンのカンディ・マリーキュリーの壮絶な人生と音楽を描いたものであった。そこにはいくつかの人権にまつわる論点が内包されていた。

第一は、彼がLGBTであるいは性的マイノリティだった点である。一九八〇年代にはそうした層の声は十分な市民権を有していなかった。今日以上にそうした層への差別は顕著であり、映画ではそれゆえの彼の苦悩が描かれていた。

第二は移民問題。フレディは、タンザニアのザンジバルに生まれ両親はインド出身である。映画でフレディ役を演じたタミ・マレックもまたエジプト系の移民である。

第三はジェンダー問題。ク

イーンのカンディの火付け役となったのが日本の女性たちだといわれているように、当時はロック音楽は男性っぽいものだというイメージがつよく、彼らの音楽は、当時の男性たちからは敬遠されるむきがあった。

これらの人権問題を内包したこの映画は、日本での興行収入一三〇億円以上を記録し大ヒットとなったが、それをささえたのは中高年層のファンやリピーターだったと聞く。では何がこの層の琴線にふれたのだろうか？ 多くの要因があるだろうが、私が最も感銘を受けたのはじつは最後のエンドロールが流れたあとである。そこで流れたショウ・マスト・ゴウ・オンという曲は、フレディがエイズに冒され自身の死を自覚してから唄った曲である。そこには映像はない。PVでは道化師を演じ、笑い笑われる姿がある。自分が死んでもショウは続けねばならない。重い人権問題の圧に苦しめながらも、最期

は、笑い笑われるシヨウマン
であることの自負を優先した
フレディの姿がそこにあつた。